



## 秋の一日

附屬幼稚園

孝

子

### 一、遠足出發

空はるり色に澄んで御庭に高くく咲いて居るしおんに赤蜻蛉が二三羽たわむれて居るある日。秋の強い日光が御窓を通して今一心に御飯事をして居る可愛い子供の顔を照らして居る。今まで夢中になつて御飯事して居たみちこさんが急に「先生本校へオートとりに行きませう、みち子もう御飯事飽きたやつたの」と、いつもの様に鼻をならすと、あちらからもこちらからも「え先生ね本校へ行きませう」、「本校本校」、「御散歩がいの御散歩」、今まで人形を抱いたりしほれたダリヤで一心に御壽司を作つて居た人達が人形も御茶碗も捨てツイくんと兩腕にすぎる。「お、大變く、こんなに皆で騒いちゃ先生の耳が破れてしまひますよ。一寸御待ちなさい」、やつとの事で飛付く人を制して、本當に御天氣がいかから本校へ行きませうか。「嬉しい……嬉しい……」。一ぱいまつはりついて居た人達がばねじかけの人形の様にはなれたと思ふと「池の組御はいり」、「池の組御散歩」とせい一ぱいの大聲をあげながら四方八

方に消えて行く。むしろの上には手足の眞黒になつた人形が濡りで淋し相。

やがてどや／＼御砂場から御遊嬉室から汗ばんだ顔にしかも漲る嬉しさをかくして集つて来る。

氣の利いた人はもう帽子をかぶつて……、「先生遠足ですか」、「本校へ行くの」、「先生千枝子筆入持つてく、御帖面どれ、晝の帖面ね、先生」。いつも寫生に行くので、矢つぎ早の質問に物言ふ暇がない。「まあまあ待つて頂戴、今日は御帖面も筆入もいらぬの、もつと／＼いゝ物を持って行きませう、何でせう。「あらツ……何でせう」。皆は鳩の様な目をくり／＼廻して御隣の人と顔を見合して居る。「御辨當ですよ」、「マア……嬉しい／＼」。思はず知らずやす子さんが飛上る。「ではね御手洗に行つてから御帽子取つて來ませうね」、「ハァーイ」。どや／＼ばた／＼大騒ぎ。出發の前はともひどい騒ぎ。

約三十分程してやつと入口の所に可愛いゝ行列が出來た。むしろに御湯、御うがひ道具、それに色紙を少しばかりを持つていよ／＼出發。「ではね行く前に御約束ませうね、先生に御斷りしないで方々にブラ／＼遊びに行かない様にませうね。「え、大丈夫」。皆の顔は嬉しさはかゝやいて居る。「今日は御辨當持つて行くつて、まるで本當の遠足みたいだね。「僕いゝや今日海苔巻だから丁度いゝな」。「私バンよ」。「御手々つないで……」。私が前にたつて歩いて行くと後の方では御辨當のはなしが始つて居る。

## 二、原　　つ　　ば

豫定の原つばに到着する。原と言つても其處はもと學校の御庭であつた所が道路にとられたのであつて、草は名ばかりしか生へて居ない。

猫じやらし、赤飯の草が所々半ば狐色になつてあるばかり、後は煉瓦のかけや木等が方々にちらばつて居る。こんな所をあんなに喜ぶのかとさつと地方の方はびつくりなさるであらうと思はれる。

「さあ着きましたね」、「先生此處で遊んでいゝの嬉しいな」、「きつとオートやバッタが澤山居るせ」、「ヤアー——」と、バラ／＼もう駈け出してしまふ。「バスケットを置てから遊びませうね」、「ハイ」、「何處に置ませうか、此の石の上は」。「先生冷たいや」、「さうね、ちや此處にこのござを敷いてあげませう」と、私はもつて居たむしろを適當な草の中へ敷く。「さあバスケットこゝへ置ませう」、「ヤアー」と、大喜で靴をぬぐのもどかしく、其の上にくろげ込む。ガチャ／＼バスケットがひつくり返る向ふの方からさつき駈け出した一團がバスケットを肩にのせてやつて來る。

「御辨當／＼サンドイッチ」、俊雄さんが名案を思ひついてかう呼ぶと、後に居たものが早速まねる。「アイスクリー／＼」、「え、汽車の御辨當はいかゞ」。汽車の御辨當と言ふから實に滑稽である。「早くいらつしやい俊雄さん」と、誰か々呼んだのでびつくりして駈け出して來る。「先生みちこ〇〇へ行つた

時御婆ちやんと御壽司買ったの、「僕だつて買ったの、大磯へ行つた時おいサンドイッチ二つと言つたよ。皆は夏休みの旅行を思ひ出したらしい。「さうそりやよかつたのね。」「さ此處へお上りなさい」。

やつと皆揃ふ。「さオートさがしませうか」と、私が立ち上ると、「先生僕お腹がすいちやつたの、御飯が食べたいなあ。」「あたしも御腹がすいちやつた。」「あたしもく。」「さうもうそんなに皆が御腹がすいちやつたの。時計は十一時十五分強。」「ちやまだ早いけど戴きませうね、お行儀よく坐りませう、お靴をちやんと揃へてね。」「二三人づゝ一かたまりになつてバスケットをかゝへ。」「アハ、、、フ、、、」とても嬉し相。御うがひ茶碗を出しうがひが濟む。

「さ戴きませうね。」「戴きます。」「戴きませうね。」「戴きませうね。」「と威勢のいゝ事。

御話する人もまれな位、皆は夢中でつめ込んで居る。「先生先生。」「なんですか。」「蟻が御飯食べにごさの上へやつて來ましたよ先生。隅の方の男のかたまりから賑やかな聲がする。」「さうですか、あんまりおいしい相だから來たのでせう、殺さないでそつと逃しておやりなさい。」「ハイ。暫くしてから又アハ、、、ハ、、、ハ、、、ハ、、、先生僕が玉子をのせてやつたら重くて歩けないんです。」「アラいやだ……」。行つて見ると大き蟻が玉子のかたまりをのせられてもがいて居る。「まあまあ、折角御馳走を戴いても持てなくちや困るはね、御馳走どけてやりませう。」「えゝ玉子をどけると蟻は大至急で逃げ出した。」「ア、喜んで行つちやつたヤアヤア」秋の日はまだ高い、赤とんぼが低く子供達の頭をかすめて行く。